

談話の冒頭部分における新情報の出現について

伊藤 晃

Abstract

From the view point of the information structure, discourse initial positions are peculiar because they do not have preceding contexts. Cleft sentences and hearsay sentences can appear in the discourse initial positions. We will find out why these sentences can be found in the discourse initial positions.*

キーワード：談話，情報構造，伝聞表現，分裂文

1. はじめに

談話における自然な情報の流れが、旧情報から新情報あるいは話し手と聞き手の間で共有された情報から聞き手にとっては未知の情報といったものであるとすると、談話の冒頭部分は、先行文脈が存在せず、情報構造上特異であると考えられる。先行文脈が存在しないにもかかわらず、談話の冒頭部分では「旧→新」の情報構造ないしは談話原則はいかにして保持されるのであろうか。

本稿では、談話の冒頭部分に現れる伝聞表現と分裂文に着目し、これらの言語形式によって、談話の冒頭において、情報構造あるいは談話原則がどのように保持されているかを分析する。

2. 伝聞表現

本節では、伝聞表現が談話において果たす役割について考察を進める。日本語の伝聞表現を観察すると、次例のように、同表現が談話の冒頭に現れうることが分かる。（#は談話の冒頭であることを示す。）

- (1) #懲戒免職になった米デンバー前総領事はパーティー参加者から「閣下」「閣下殿」と奉られていたという。館員にも自分を「閣下」と呼ばせていたそうだ。前総領事は週に1～2回、日系人を招いて小規模なパーティーを開いて懇談していたというから積極的な人だったに違いない。それにしても「閣下殿」とは！盛り場でサラリーマンが「社長」と声をかけられて、仕方がない、一杯やるか、とでれでれになるあのメカニズム。（毎日新聞 7月28日2001年）

このような談話の冒頭部分に現れる伝聞表現が談話において果たしている機能は、伊藤（2007）

でも述べたように、談話にトピックを導入することであると思われる。次例では、談話の冒頭に現れた伝聞表現によって「情報を思い出すには覚えるよりも相当多くの時間を要すること」がトピックとして談話に導入され、後続部分に導入されたトピックに関する記述が続いていることが分かる。

- (2) #情報を思い出す時間は覚える時間の35倍かかるという。科学技術振興事業団プロジェクトと岡崎国立共同研究機構生理学研究所などがサルを使って実験した結果だそうだ。かく言う人間も「ええ、それはですね、つまりその・・・」と冷や汗をかきながら懸命に思い出そうとすることがしょっちゅうある。せっかくのどまで出かけたのに、脳の奥にさっさと薄情に引っ込むことだってないわけではない。サル君の記憶力は大したものだ。(毎日新聞 1月27日2001年)

さらに以下にあげる例を検討してみよう。

- (3) #ワシントンで覚えた言葉だが、米軍に「マザー・テスト」という俗語があるそうだ。国民の命を預かり、兵士を危険な任務に送る最高責任者は大統領。その資質と判断を問う試練をさす。大統領は命令書にサインするだけ。死ぬのは一線の兵士たちだ。命令とはいえど、愛する息子や娘を奪われた母親たちは嘆き、悲しみ、どん底に沈む。その時、それがいかに国家のために尊い犠牲だったかを衷心から説明し、納得してもらおう。母(マザー)の許しを求める試練だから「マザー・テスト」。自ら死地に身をさらさない最高司令官の究極の使命だ。(毎日新聞 9月24日2002年)

本例においては、談話の冒頭に現れた伝聞表現によって「マザー・テスト」が談話にトピックとして導入されており、後続する文脈にこの「マザー・テスト」に関する記述が現れていることが良く分かる。

本稿では、「という」「そうだ」といった表現以外に、「ようだ」「らしい」といった表現も伝聞表現として扱う。以下に見られるように、「ようだ」「らしい」といった表現は、「という」「そうだ」といった表現と同様に、情報の出所を表す「～によると」という表現と共起しうるからである。

- (4) 新聞によると、事故で50人が死亡したという／そうだ／ようだ／らしい／*だろう／*かもしれない／*にちがいない。
- (5) 花子によると、太郎は大学に合格したという／そうだ／ようだ／らしい／*だろう／*かもしれない／*にちがいない。

以下の例では、談話の冒頭に伝聞表現「ようだ」「らしい」が現れ、これまでに見た例と同様にトピック導入機能を果たしている。

- (6) #昔の人はヘビの脱皮を見て、生命そのものが再生し、若返るのだと考えたようだ。古代メソポタミアの「ギルガメッシュ叙事詩」には王ギルガメッシュが、永遠の生命を求める遍歴で不死の草を手に入れながら、ヘビにその草を盗まれてしまうという物語がある。沖縄の昔話にも、神がヘビを殺そうとして死水と生き水を浴びるよう動物たちに命じたが、頭のいいヘビだけがみんなより先にきて不死の生き水を浴びてしまう話がある。おかげで他の動物は死水を浴びて死を運命づけられてしまった。(毎日新聞 9月23日2003年)

- (7) #古くから「完全なる大使」がいろいろ論じられてきたらしい。16世紀末のイタリア人の著作をもとに、矢田部厚彦氏が現代版「完全なる大使」を描いている。（「職業としての外交官」文春新書）。以下、その短縮版。《英語は当然。ほかに仏・独・露・スペイン・アラビア・中国語のいずれか（できれば複数）に堪能で、国際法・公法・私法に通じ、国際経済はもとより経済・財政全般、環境、人口、老人問題、軍事戦略に関する豊富な知識と、科学技術的常識、文学・音楽・美術に関する深い教養を持つ》。（毎日新聞 7月30日2002年）

トピックは、談話全体のトピックとして設定されうるものと、談話が展開する中で他のトピックに取って代わられる一時的なトピックとでもいうべきものとに分けることが可能であると思われるが、伝聞表現によって談話の冒頭に導入されるトピックは談話全体のトピックとして機能していると思われる。この点が次節で見る分裂文によるトピック導入と異なるところであろう。詳細は、第3節で述べるが、分裂文によってトピックが談話に導入される場合は、同構文が談話の冒頭部分に現れる例も含めて、談話全体のトピックであるとは考えられず、一時的なものであると考えられるからである。

以下にあげるのは、談話の冒頭部分に現れた伝聞表現によって導入された要素が談話全体のトピックであることが明示的に理解されうる例である。談話の冒頭部分と最後の部分を示してある。

- (8) #かたくなに我意を押し通すことを「いこじ」というが、一説には意地っ張りで頑固であることを示す「いこづる」という古語から生まれたという。それが「依怙地」とあて字をされるようになったのは、とかく我意は「依怙」一偏りを生じやすいからだろう。首相として終戦の日に21年ぶりの靖国参拝に踏み切った小泉純一郎首相は、むしろ自分を依怙地とは思っていないに違いない。むしろ別の説で「いこじ」の語源とされる「意気地」を、5年前の公約実現という形で通したつもりなのかもしれない。（中略）ほかならぬ日本国民とその子孫の運命を一身に担う首相である。一国の指導者の行動はそれがどんな善意や理想によるものであれ、判断を誤れば国民、国家を危うくする。その責任をすべて潔く引き受けるのが政治家の誇りのはずだ。そこに「世界注視の私事」などあろうはずがない。依怙地も、意気地もどだい我執である。政治指導者が一瞬も目を離してはならないのは、公私を問わず自らの判断や行動が引き起こす結果であり、それにとまなう責任だ。政権末期だといってタンカで見物人を喜ばせている場合ではない。（毎日新聞 8月16日2006年）

談話の冒頭において「いこじ」がトピックとして伝聞表現によって導入され、同要素が中略部分をはさんで、談話の最後の部分にいたってもトピックであり続けていることが分かる。このことは、特に談話の最後の部分の下線部に見て取ることが可能であると思われる。以下にあげる例についても同様の分析があてはまる。

- (9) #「揣摩憶測」は当て推量のことだが、昔の中国には“揣摩の術”というのがあったうだ。人の心を読み取る術のことで、戦国時代、強国の秦に対する共同戦線—「合従」策を他の6国に説いた蘇秦はこの術を使ったという。「鶏口となるも、牛後となるなかれ」は、その蘇秦が小国の韓の王に、秦への服従を思いとどまるよう説得した際に使った

当時のことわざだ。王の自尊心を読み、それを操って対秦同盟への参加を決断させたわけで、これも術の成果なのだろうか。(中略) この手の M & A が日本でも珍しくなくなるかどうかを占ううえでも注目を集める両ケースだ。株主はもちろん、従業員などのステークホルダー(利害関係者)の心中を読み、その理解を得られるのはいったい誰か。揣摩の力量が試される。(毎日新聞 8月9日2006年)

トピックの生起位置について考えてみた場合、談話全体のトピックは、談話の初め、中ごろ、終わりのうち、談話の冒頭部分に設定されるのが自然であると考えられる。しかしながら、談話の冒頭部分は、先行文脈が存在しないため、通常、聞き手の知識に依存する形での情報提示が困難である。本節では、伝聞表現が談話の冒頭部分に現れ、談話全体のトピックを導入している例を見てきたが、伝聞表現は、情報の出所が話し手でも聞き手でもないことを明示する言語形式である。伝聞表現を用いることで、話し手は、聞き手の知識状態に依存することなしに情報を提示することが可能になるわけである。先行文脈が存在せず、通常、聞き手の知識に依存することが出来ない談話の冒頭部分であっても、伝聞表現を用いて談話主題を提示することは可能である。

3. 分裂文

本節では、分裂文の構文上の特徴を簡単に見た後、この構文が談話において果たす機能を分析する。

3.1. 日本語の分裂文

英語には(10)のような文から派生した(11)、(12)のような文が存在する。

- (10) John bought a car.
- (11) What John bought is a car.
- (12) It is a car that John bought.

(12)はCleft SentenceあるいはIt-Cleftとよばれ、(11)はPseudo-CleftあるいはWh-Cleftとよばれる。英語のCleftに相当する日本語の構文は(13)のような文から派生した(14)のような文である。(15)は(14)の文構造を示したものである。

- (13) 太郎は車を買った。
- (14) 太郎が買ったのは車だ。
- (15) [[太郎が買ったの]は車だ]

(14)では、(13)においては同一文中にあった「太郎」と「車」が、(15)に示されるように、従属節中の要素と主節中の要素に分裂する形で現れている。(15)のような文は「太郎が買ったのは他の何物でもなく車だ。」といった読みが与えられることから「強調構文」とよばれることが多いが小論では「分裂文」あるいは「XのはYだ」構文といった呼び方をする。また、「トピック」と「話題」を特に区別せずに用いる場合がある。

3.2. 分裂文の談話における機能

3.2.1. 話題導入機能

伊藤（1992）（1993）等で見たとように、談話における日本語の分裂文/XのはYだ構文の主たる機能は談話に話題を導入することである。先行文脈を受けはするが、話者は聞き手の知識の状態に関して何らかの想定を行っているわけではない。聞き手の知識の状態とは関係なく新たに導入された話題、「Y」に注意を引き付けて話を展開して行くのである。例を見てみよう。

- (16) 一人の子供が棧橋から飛び込んだ。そのまま12,3メートルの海底まで潜り、足首に留めていたナイフで段ボール箱の封を裂いた。箱にびっしりと詰まっていたのはレコード盤だった。子供はその中の一枚を持って浮上し、男に、これ貰っていいですか？と聞いた。子供が手に握っていたレコードのジャケットは、大きくてキラキラした黒い車から降りる夜会服の女の写真だった。（村上龍「悲しき熱帯」）

分裂文によって談話に話題、「レコード盤」を導入し、後続部分で「レコード盤」についての記述が行われているのが分かる。以下の例についても同様である。

- (17) こうして、それから5年間、毎年10月から春まで向こうでコタツ売り。コタツの土壤があったので商品の説明には困らなかったが、手を焼いたのは、その国民性に基づく商法でした。「昨年10台売ったから、今年は30台を」と頼むと、向こうは客待ち商法なのでのんびりしたもの。「去年は寒かったから売れただけ。今年はどうなるか分からない。インシャラー（アラーの神のおぼしめしのままに）。」どこに行っても、「インシャラー。インシャラー」という厚い壁。営業努力という言葉はここにはなく、自然の成り行きのみです。（毎日新聞9月25日1991年）

先に日本語の分裂文は、先行文脈を受けはするが前提部分は聞き手の意識の中に存在すると話者が想定しうような情報を表してはいない。つまり話者は聞き手の知識の状態について何らかの想定を行っているわけではないと述べた。このことをもう少し詳しく見ておこう。これまでにあげた例には先行文脈とのつながりが比較的容易に理解されるものが多かったが次のような例ではどうだろう。

- (18) そんなある日、作家の土師清二先生が、突然訪ねて下さったのです。家の暮らしぶりを見て「若いうちの苦労は、かっても出るもの。頑張んなさいよ」。そうおっしゃって結婚祝いにデパートの商品券を下さいました。なにはともあれ、一番最初に買わせていただいたのは、まな板でした。（板きれをまな板がわりにしていたのです）抱えて帰って一尺五寸（約50センチ）ほどの流しに同じ大きさの新品のまな板を置いたら、何だか勇気がふつふつとわいたのです。恩情をいただいた私は、強くなっていました。（毎日新聞7月4日1991年）

「商品券をもらえばそれで何かを買う」と聞き手は考えているといった想定を話者が行っていると解釈することは可能であろう。

(16), (17), (18) では先行文脈とのつながりが明示的な形では現れていないものの話者が聞き手の知識の状態に関して何らかの想定を行っていると考えられることは可能であったが以下にあげる例ではそのように考えることさえできないように思われる。

- (19) 約57億円をかけ、今春開校したばかりの東京都立新宿山吹高校。刈谷東の普通科2コー

スに対し、普通科と情報科で6コースと多様な講座が用意されている。驚かされるのは、チャイムの鳴らない校内を好きな服装で闊歩する生徒の意欲の高さだ。「親に頼るのが嫌だから、就職して通えるところを選んだ」「中学では登校拒否になったけど、ここなら自分のペースで勉強できる」と話す個性派ぞろい。(毎日新聞7月5日1991年)

本例のように分裂文/XのはYだ構文のXの部分に話者の感情、主観的な判断等を表す表現が用いられている場合、先行文脈とのつながりを何らかの形で認めようとするのは無理である。聞き手との共有知識、聞き手の知識に関する話者の想定といったこととは無関係に分裂文を使って談話に話題を導入し話を展開していると見なすのが自然である。

これまでの議論で日本語の分裂文の談話における主たる機能は、話題を導入することであるということが明らかになったと思う。以下では、このような分裂文の機能をさらに詳細に分析していくことにする。

3.2.2. 談話の冒頭に現れる分裂文

次の(20)に見られるように分裂文は談話の冒頭に現れることがある。(＃は談話の冒頭であることを示す)

(20) # 中国残留日本人孤児と呼ばれる人々がはじめて来日したのは1981年だった。以来、写真家、新正卓さんは宿舎の東京、代々木オリンピック記念青少年センターに通って、全員の写真を撮り続けた。(毎日新聞1989年)

3. 2. 1. において日本語の分裂文では、話者は聞き手の知識の状態に関して何らかの想定を行っているのではないと述べたが、(20)のような分裂文の存在はこの主張を支持している。先行文脈が存在しないからである。(21)についても同様である。

(21) # 中国の「鰐」という文字に「ワニ」をあてたのは古代日本人の誤訳だったそうだ。山陰や大和、四国、九州ではフカのことをワニといった。実物を知らぬ知識人が誤って鰐をワニと訳してしまった。(毎日新聞1989年)

(20)、(21)のような例について、分裂文/XのはYだ構文のXの部分は話者と聞き手との間に共有された一般的な知識を表しているので(言外の)先行文脈とのつながりが認められると考えるむきもあろう。しかしながら、次の(22)、(23)の分裂文のXの部分が話者と聞き手との間に共有された一般的な知識を表しているとは考えにくい。

(22) # 井下田憲さんが異常に気付いたのは4年前の10月10日だった。朝、目を覚まして布団から起きようとしたが、転がるばかりで起き上がることができない。寝ぼけているのかなと思った。53歳の井下田さんは救急車で病院に運ばれた。脳卒中で左半身がまひしていた。(毎日新聞7月18日1991年)

(23) # 中村伸郎さんが毎週金曜日の夜10時、「授業」という芝居をはじめたのは1972年、64歳のときだ。雨の夜も雪の夜も、舞台に立った。10年間に休演したのはたった3回。82年に紀伊国屋演劇賞を受賞した。(毎日新聞7月7日1991年)

3.2.3. 談話の中程に現れる分裂文

談話の中程に現れる分裂文は、それが使用される場面を先行部分あるいは後続する部分との

関係に注目して細かく見ていくと六つのタイプに下位分類される。

(1) 追記

このタイプの分裂文は、先行部分における記述を補ったり、情報を付け加えたりするのに用いられる。

- (24) このような傾向は 55 年、川崎市で浪人中の息子が両親を金属バットで殺した事件、さらに昨年、東京都目黒区で起きた中学生による両親と祖母殺しなどに共通するものであると思う。典型的な中産階級家庭に育ち過剰なほどの両親の期待を背にささいな挫折を「落ちこぼれ」と受け止める感性。さらに共通するのは殺人という重大な行為を犯しながらその認識が希薄な点である。（毎日新聞 1989 年）

(2) 話題転換

次例では同構文が話題を転換する際に使われている。

- (25) 明治 30 年の夏、大学生の柳田国雄は渥美半島の突端、伊良湖岬で浜に打ち上げられたヤシの実を見た。（中略）治承元年平家打倒の陰謀を企てたかどで俊寛は平康頼らとともに鬼界が島に流された。康頼は名前を記した卒都婆千本を海に流したところ（中略）ヤシの実や卒都婆を運んだのは黒潮である。フィリピンと台湾との間のバジー海峡付近にはじまり・・・（毎日新聞 1989 年）

これまでに観察してきた分裂文の例には、程度の差はあるものの本例に類似した働きをしているものが多い。これは日本語の分裂文の主たる機能が、前節で見た談話全体の主題を導入する伝聞表現と異なり、一時的なトピックないしサブトピックを導入することであることと関係があるものと思われる。

(3) 場面設定

分裂文 /X のは Y だ構文が聞き手のイメージを喚起するのに使われている。X の部分で聞き手の頭の中にイメージを描かせて導入のお膳立てをしているのである。

- (26) 鎧戸を閉じた窓のそばで革張りのイージーチェアに座っているのは、かつてヨーゼフ・ゲッベルズのナチ宣伝省でユダヤ人問題のエキスパートとして鳴らしたハンス・アブラーである。戦後すぐオデッサの手でエジプトに逃れ、以来同地に住んでいるアブラーは・・・（中略）・・・彼の左側に座っているのは、やはり元ナチ宣伝省のスタッフで現在同じくエジプト情報省に務めているルドウィヒ・ハイデンである。ハイデンは・・・（フレデリック・フォーサイス / 篠原 慎 訳「オデッサファイル」）

本例は、写真や絵のキャプションに近い。

(4) 対比

追記用法では、先行部分と類似の情報が分裂文によって提示されるが、以下の例では、先行部分あるいは後続部分とは対照的な情報が同構文によって提示されている。

- (27) 「Z - 100」は昨年 5 月に申請が出され、ほぼ 1 年で承認にこぎつけた。あっと驚く効果があるかといえば、厚生省は「取り立てて注目に値する効果があるわけではない」と断っている。それなのにとんとん拍子のスピード承認。この薬は運がいい。不運なのは丸山ワクチンだ。抗がん剤として製造認可申請が出たのは 1976 年、中央薬事審議会は 81 年に「有効性を確認できず、現段階では医薬品として承認することは適当

ではない」と結論を下した。(毎日新聞6月7日1991年)

(5) 強調

分裂文/XのはYだ構文に先行する部分でいくつかの情報が与えられた後で、そういったものの中でも特にYという形で強調される。

(28) 日本人従軍慰安婦には、かつて娼妓だった人が多かった模様だが、彼女たちに対しては、「お国のためのご奉公、天皇陛下の御為だから」という甘言で釣った、という。ごくごく一部の女たちを除いて日本人慰安婦たちも悲惨といえたが、わけても悲惨きわまるのは朝鮮人の従軍慰安婦たちであろう。彼女らは、人狩り同然で、無理やり腕づく、力づくで故郷から連れ去られ、はるかかなたの戦場に送られ、想像を絶するような苦行を強いられたのであった。(毎日新聞2月5日1990年)

(6) 意外性

分裂文/XのはYだ構文のXとYの部分に通常は結び付かない、あるいは結び付くはずがないと考えられるような要素を置くことによって意外性を表す。

(29) 判事のめざすは町一番のホテルで、そこではシャノン産のすばらしいサーモンが食べられるのだ。彼がそのホテルに向かって道路を横切ろうとしたとき、一台のピカピカに磨きあげられた高級車がホテルから出てくるのが見えた。なんと、運転しているのはオコナーではないか。「見ましたか、いまのはあいつですよ」判事の傍で、驚きの声が上がった。声につられて彼がふと右を見ると、トラリーの食料品屋がわきに立っていた。「見ましたよ」高級車はホテルの前庭から出てきた。オコナーのわきに、黒ずくめの服装をした男がすわっていた。(フレデリック・フォーサイス/篠原慎訳「帝王」)

以上、分裂文が様々な側面を持つことを見てきたが、ここで注目すべきは、(1)、(2)、(3)のタイプの分裂文と(4)、(5)、(6)のタイプの分裂文との間には一線を画することができるということである。つまり、「対比」「強調」「意外性」を表す分裂文においては他項との関係が問題になるが、「追記」「話題転換」「場面設定」を行う分裂文では他項との関係は問題にならないのである。したがって、(1)、(2)、(3)のタイプの分裂文に比べて(4)、(5)、(6)のタイプの分裂文の方が先行文脈寄りであるといえる。

3.2.4. 談話の最後に現れる分裂文

次例に見られるように分裂文は談話の最後にも現れる。

(30) 入隊してからしばらくして、学生時代の病気が再発し、長い白衣生活の後に除役になり帰された。もとの画室の生活に戻って、昭和16年に太平洋戦争が始まる。緒戦のシンガポール総攻撃に、横須賀重砲兵連隊が参加していたことを知ったのは、かなりたって日本も敗戦の色が濃くなってきたころである。(毎日新聞1月18日1990年)

このタイプの分裂文は、話が展開されていくべき後続部分が存在しないので、これまで繰り返し主張してきた分裂文の話題導入機能に対する反例であると思われるかもしれない。しかしながら、このタイプの分裂文を用いるねらいは、本来続くべき部分を聞き手に考えさせ余韻を残して文章をしめくくりにあるのである。

3.2.5. 降格分裂文

ここで取り上げる分裂文は3. 2. 1. ～3. 2. 4. で観察した分裂文とは異なった特徴を持つ。まず(31)の例を見られたい。

- (31) 1989年は一円玉の年として永久に記憶されるだろう。4月の消費税実施で一躍脚光をあびたのに引き続き、こんどは広島市の水道システム設計入札で二千九百万円を抑えて堂々、一円が勝利を収めた。「皇国の興廢この一戦にあり。各員一層奮励努力せよ」と檄をとばしたのは日本海海戦（1905年）を前にした連合艦隊の東郷平八郎指令長官だった。一円玉一つ握って入札会場に出掛けた富士通広島支店は「企業の興廢この一銭にあり」の心境に違いない。（毎日新聞1989年）

本例の分裂文/XのはYだ構文の役割は、後続する部分、特に「企業の興廢この一銭にあり」から考えて「皇国の興廢この一戦にあり」を談話に導入することであると思われる。3. 2. 1. ～3. 2. 4. で見てきた分裂文がYを話題として談話に導入していたのとは逆である。通常の語順では「東郷平八郎指令長官」が目立ち過ぎて文脈にそぐわないので主語の位置から分裂文のYの位置に降格されている。コメント(X)とそれを行う人物(Y)ではコメントの方が重要であり、人物は分裂文に含まれる形で文脈に導入されるが後続部分に当該の人物に関する記述が現れるわけではない。同構文のこういった特徴を踏まえて(31)のような分裂文を3. 2. 1. ～3. 2. 4. の分裂文と区別して降格分裂文と呼ぶことにする。

降格分裂文のYの位置に現れる人物は降格されているとはいってもXの部分に言わば“ハクをつける”だけのインパクトを持つ人物でなければならない。Yにただの人がきたのでは同構文のXの部分を談話に導入するという機能は果されない。

以上、本節では、日本語の分裂文の談話における機能を分析したが、その結果、以下の緒点が明らかになったことと思う。

- (1) 日本語の分裂文/XのはYだ構文の談話における主たる機能は、談話に話題(Y)を導入して話を展開していくことである。先行文脈を受けはするが聞き手の知識の状態に関して何らかの想定を行っているわけではない。
- (2) 同構文の機能を先行部分、あるいは後続部分との関係に注目して細分化してみると、「追記」「話題転換」「場面設定」を行ったり、「対比」「強調」「意外性」を表したりしていることがわかる。
- (3) (1)のタイプの分裂文に対して、通常の語順のままでは目立ち過ぎる要素（主語の位置の人物）をYの位置に降格させ、Xの部分を談話に導入する降格分裂文が存在する。

分裂文によって談話にトピックが導入されるとはいつても、そのトピックの性格は、前節で見た伝聞表現によって談話に導入されるトピックとは異なる。伝聞表現によって談話の冒頭に導入されるトピックは、談話全体のトピックあるいはディスコーストピックであるのに対して、分裂文によって談話に導入されるトピックは、同構文が談話の冒頭に現れる例も含めて、談話全体のトピックではなく、談話が進行する中で他のトピックに取って代わられうる一時的なトピックあるいはサブトピックである。

これまで見てきたように、分裂文は、先行文脈に依存せず談話の冒頭部分にも生起可能であるが、このことは同構文の構文としての成り立ちに関係していると思われる。分裂文、「Xのは

Yだ」構文においては、前提部分、「X」の部分に変項の存在が想定され、この変項に値を与える要素が「Y」の位置に現れている。例えば、「太郎が注文したのはコーヒーだ」といった分裂文は、「太郎がxを注文した。そのxはコーヒーだ」といった形で成り立っているのである。分裂文は、疑問文とその答えを話者自身が述べているような表現であり、同構文のこのような特徴が同構文が文脈に依存せずとも談話の中に現れることを可能にしていると考えられる。

4. おわりに

談話の冒頭部分は、先行文脈が存在しないため、通常、聞き手の知識に依存する形での情報提示が困難である。本稿では、伝聞表現が談話の冒頭部分に現れ、談話全体のトピックを導入している例を見てきたが、伝聞表現は、情報の出所が話し手でも聞き手でもないことを明示する言語形式である。伝聞表現を用いることで、話し手は、聞き手の知識状態に依存することなしに情報を提示することが可能になるわけである。分裂文、「XのはYだ」構文においては、前提部分、「X」の部分に変項の存在が想定され、この変項に値を与える要素が「Y」の位置に現れている。例えば、「太郎が注文したのはコーヒーだ」といった分裂文は、「太郎がxを注文した。そのxはコーヒーだ」といった形で成り立っているのである。分裂文は、疑問文とその答えを話者自身が述べているような表現であり、同構文のこのような特徴が同構文が文脈に依存せずとも談話の中に現れることを可能にしていると考えられ、さらには、同構文が先行文脈を持たない談話の冒頭部分に生起しうることと関連しているのであろう。

注

- * 児玉先生には1993年から3年間立命館大学大学院の博士後期課程で御指導いただいた。先生からは在学中より「理論をしっかりやっておくように」と度々言われていたのが、結局、特定の言語理論を自家薬籠中の物にすることは出来ずに終わってしまった。今となっては叶わないことであるが、先生の御指導通りに言語理論をしっかり勉強しておけば、先生との議論も変わったものになっていたのではないかと思っている。先生の御期待にこたえられない出来の悪い弟子であったことを悔やみつつ、先生からいただいた数々の御学恩に感謝したい。

参考文献

- Akiyo Asano, Ryuichi Washio, Kunihiko Ogawa. 1979. "Aspects of Discourse-Initial Sentences: A Case Study from English and Japanese" 研究報告『日本語の基本構造に関する理論的・実証的研究』
- Givon, T. et al. eds. 1983 "Topic Continuity in Discourse: A Quantitative Cross-Language Study" John Benjamins.
- Higgins, F. R., 1976. "The pseudo-cleft construction in English." Indiana University Linguistics Club.
- Inoue, Kazuko, 1979. "A study of discourse initial sentences." 研究報告『日本語の基本構造に関する理論的・実証的研究』
- 伊藤 見. 1992. 「日本語の分裂文の談話における機能」『さわらび』1号 1 - 22. 神戸市外国語大学文法研究会.
- 伊藤 見. 1993. 「分裂文と「のだ」文 - 課題設定のあり方と構文の文脈依存性」『さわらび』2号 2 - 10. 神戸市外国語大学文法研究会.

談話の冒頭部分における新情報の出現について（伊藤）

- 伊藤 晃. 2007. 「日英語の伝聞表現をめぐって」『北九州市立大学外国語学部紀要』 15 - 30.
- 神尾昭雄. 1990. 『情報のなわ張り理論 言語の機能的分析』大修館.
- 益岡隆志・田窪行則 1992 『基礎日本語文法 一改訂版一』 くろしお出版.
- 益岡隆志. 2000. 『日本語文法の諸相』 くろしお出版.
- 西山祐司. 1979. 「新情報・旧情報という概念について」研究報告『日本語の基本構造に関する理論的, 実証的研究』

